

我が友デルス②

仕事に徹する心優しき人

白道のカミミ〜ノ便り

素晴らしい仕事をする人を訪ねたら、煮ても焼いても食えない偏屈者だったという話は珍しくない。

小学生の頃、クラスメートの家に遊びに行った時、玄関の戸が壊れていて開け閉めに難儀した。友人の父親は頑固一徹の名人として、ろわさの高い建具職人だった。母親が「他人の家のことはけんかし

でも最高の仕事をするのに、我が家はほったらかし」と嘆いていた。赤銅色の肌の名人はキセルをくゆらしながら、村一番の貧相な家の中で誇り高く動じなかった。

我が友デルスも相当に偏屈者である。山深い村を15歳で出て桐



「元気」の前に「カラ」の文字が初めはついていた＝邑南町、ペアトリーチェさん撮影

寄職人として修業した。あけすけに物を言う大阪で、目の肥えた人たちにもまれた仕事は見事である。親の介護のために帰郷して二十数年になる。

仕事は徹底している。素材を幾年も乾燥させ、粗削りをして更に何年も乾かす。大抵の人は注文したことを忘れてしまう。

彼の仕事に隙はない。目は疲れ肩が凝る。そこで美郷の潮温泉に浸り、ついでに我が工房に足を延ばす。コーヒーを飲み馬鹿話をする。ガハハと笑えば凝りもほぐれる。

数年前、古い石見の壺に「カラ元気はつらつ・銭宝の里」と一文ずつ書いて村の道路にずらりと並べた。長老から横やりが入り、その夜に全ての壺を撤去した。

「元気はつらつ」では元気でない人は肩身が狭かろうと、「カラ元気」と書いた心優しい人なのである。

それにしても、素晴らしい職人芸と偏屈者との相関係数はいまだに健在のようだ。まるやかになくていく自分を戒めなければ！